埋蔵文化財 愛知

No. 19

シリーズ「条里制」を探る

松河戸遺跡の条里地割

松河戸遺跡は名古屋市の北東に接する春日井市の南西部、松河戸町に所在し、地理的には濃尾平野の南半部を西へ流れる庄内川中流域の北側に広がる沖積地に立地している。松河戸町付近一帯は近年まで水田がよく残っており、愛知県下で条里制地割が広範に認められる数少ない地域である。また、文献史学や歴史地理学の面からは醍醐寺文書に見られる安食荘の故地に比定されてきた。この地域を名古屋環状２号線が横切ることとなり、条里制遺構の確認を主目的として、昭和62年度から大規模な発掘調査を行ってきた。

昭和62年度には13,431㎡の発掘調査を行い、現水田を含めて３～５面の水田面を確認し、最下層の水田は15世紀代に埋没していることや、旧地形の起伏が激しいために水田化されない微高地が多く存在していたことなどが明らかになった。

昭和63年度は27,650㎡の調査を行った。その結果、現水田下に２面の水田を確認した。時期は出土遺物により、下層水田が15世紀後半～17世紀初頭、上層水田は17世紀中葉～19世紀中葉に属する。水田区画は１町約109ｍの方格地割で、Ｄ・Ｅ・Ｆ区東半とＧ・Ｈ・Ｌ区は南北方向の長地型地割、Ｄ・Ｅ・Ｆ区西半とＣ・Ｉ・Ｊ・Ｋ区は東西方向の長地型地割を呈している（図４）。

この調査で特筆すべきは多数検出された土坑と水田面から出土した大量の銭貨である。土坑は一辺（直径）１ｍ前後の隅丸方形ないし円形を呈し、深さは50㎝程度である。主に一筆の水田区画のコーナーか４辺いずれかの畔に接してつくられており、軸方向は畔に一致する（図１）。埋土は粘質土がブロック状に充填され、土坑の機能が失われた時点で人為的に埋め戻されたものと思われる。埋土には遺物がほとんど見られない。また、同じところに幾度も重複して築かれる例も認められる。以上のような点から水田耕作と深く係わりのある機能が想定される。具体的には水田の水口付近に土坑を掘り、堆肥などを入れてその上を水が流れることによって肥料を水田全体に行き渡らせる機能を有するものではないかと考えている。

銭貨については、江戸時代の寛永通宝の他、宋・明銭が見られ、63Ｇ・Ｈ区だけで100枚近く出土している（図３）。これは春先の荒起こしの際に豊作を願って田に銭をまく風習が各地に残っているとのことで、松河戸遺跡の例もこれに類するものかと思われる。

平成元年度の調査では、89Ｄ・Ｆ区の微高地上においては13～14世紀ごろの屋敷地を区画する溝や柵列を数条を検出した。これらの遺構の

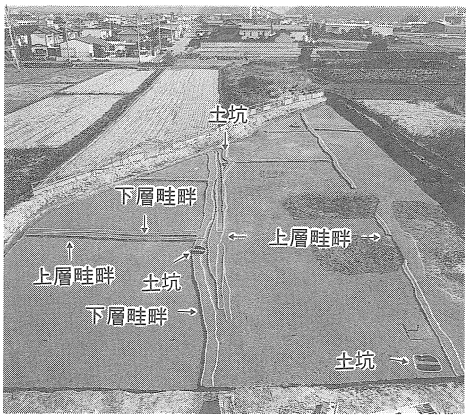


図１　63Ｋ区水田遺構検出状況

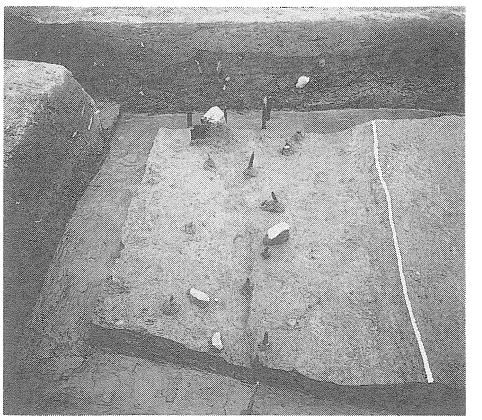


図２　63Ｊ区条里坪境溝検出状況

方位は周囲の条里に対して北で若干西に偏している。このことは、下層水田の施行年代を考えるうえで重要な意味を持ってくる。すなわち、松河戸遺跡の条里制遺構は従来言われているような、古代にまで遡り得るものではないということである。これは近年、全国で行われている条里制遺構の発掘調査の成果と一致する。

そもそも条里制の研究は現在各地に残っている条里制の水田区画がそのまま、班田収授法にしたがって奈良時代に施行されたものであるということを大前提に、歴史地理学の側から始められた。しかし、考古学による発掘調査のメスが入れられるようになると、現在の水田区画はせいぜい平安時代前期にまで遡りうるものが数例あるに過ぎず、多くは中・近世の新田開発に伴うもののようである。そして、奈良時代の水田は必ずしも1町方格を長地型あるいは半折型で10等分したようなきちんとしたものではないということもわかっている。このように、現在の条里制研究には多くの矛盾が生じてきている。そのため、これからは古代の税貢納形態を含めて、条里制とは何なのかというところにまで立ち返って検討しなければならないところに来ている、と言えるのではなかろうか。（樋上 昇）

参考文献

北村和宏「尾張・三河国の「条里制」に関する覚書」『条里制研究』第4号 1988

北村和宏ほか「松河戸遺跡」(財)愛知県埋蔵文化財センター『年報 昭和62年度』1988

後藤浩一ほか「松河戸遺跡」(財)愛知県埋蔵文化財センター『年報 昭和63年度』1989

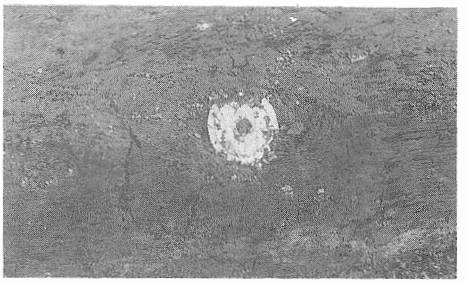
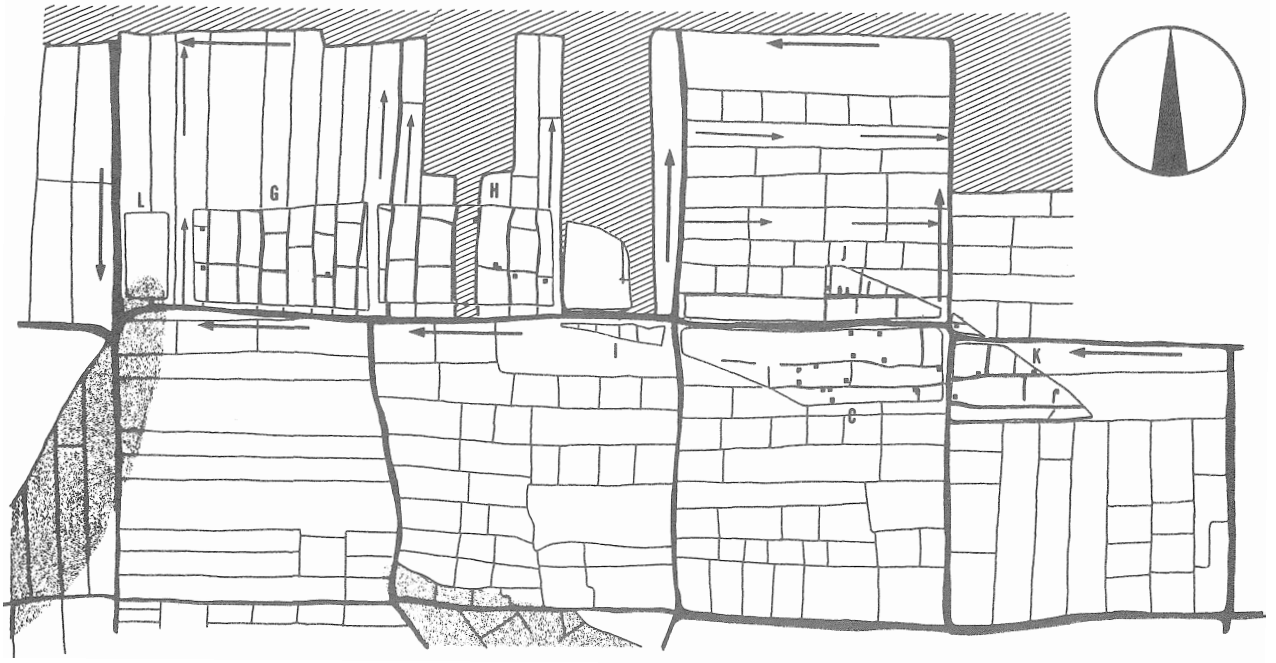


図3 63GH区銭貨出土状況



『年報 昭和63年度』1989より引用

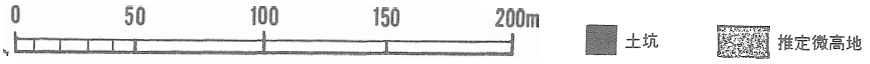


図4 現水田と発掘された水田(下層水田) 矢印は水流の方向(太―用水路、細―水田内)

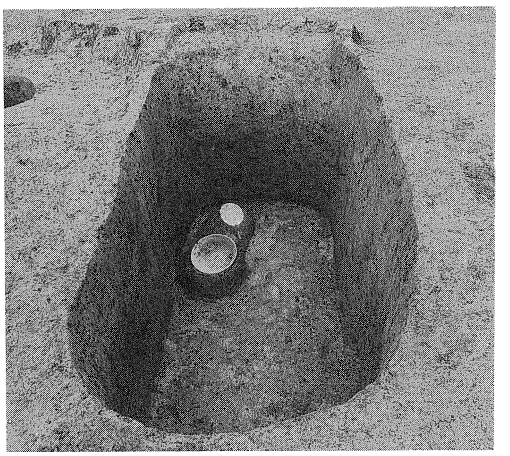
市町だより

志貴野遺跡の中世埋葬土坑について

西尾市教育委員会

西尾市北部地域の志貴野町地内に所在する志貴野遺跡は、８～11世紀の奈良、平安時代の集落で、洪積台地の南東側に竪穴住居、掘立柱建物を100棟以上も配する遺跡である。また、西尾市のシンボル的立陵の八ツ面（雲母）山を中心に弥生時代～中世にかけて点在する集落の一つである。

今年の７月から10月にかけて実施した調査では、古代の住居跡とともに、中世の埋葬土坑４基を検出した。埋葬土坑は全て主軸を南北方向に向けて設け、長さ２に対し幅１の割合いを示す隅丸長方形である。これら土坑からは頭位と思われる北側に13世紀後半の山茶椀を出土し、１基から銅製の和鏡と山皿、山茶椀が北西隅に縦方向に並んで伴出した。和鏡は遺存状態は良くないが、円形で直径８㎝を測り、中央に円形の鈕を持ち、断面方形の幅２㎜の縁を持つ素文



鏡である。

こうした中世葬墓制については磐田市一の谷中世墳墓群の発掘で解明されつつあるが、本遺跡土坑墓より出土する山茶椀、山皿、和鏡は一の谷墳墓群出土遺物にみられる事例であり、13世紀後半の土坑墓であることなど共通性が認められる。本遺跡では数は少ないが、中世葬墓について貴重な資料といえる。　（松井直樹）

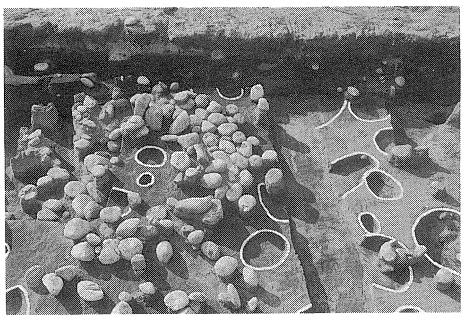
水汲（みずくみ）遺跡

藤岡町教育委員会

西加茂郡藤岡町水汲遺跡は、藤岡町の東端標高90m 前後の矢作川右岸河岸段丘上に形成された遺跡である。過去二度程発掘調査が実施され縄文時代前期～後期にわたる良好な遺跡であることが確認されていたが、今回圃場整備に先立ち７月下旬～９月上旬にかけて約350㎡（Ａ区、Ｂ区の２地点）の面積で調査を実施した。

過去、縄文遺跡とされていた当遺跡において、15世紀の灰釉壺・縁釉小皿片、近世初頭（戦国時代）の美濃鉄釉天目茶椀・茶入れ、銭貨（天聖通宝）などを伴う掘立柱建物、土坑を多数検出した。北西山稜頂部に所在する川口城跡との関連集落跡の存在を窺わせる。

また、下面においては、縄文前期～後期にかけての多量の遺物と共に土坑、ピットが検出され、住居跡こそ明らかにしえなかったがこの時期における水汲遺跡の活況が想起される。特に

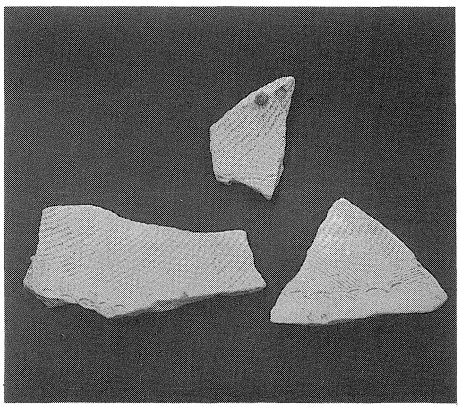


縄文後期に属すると思われる環状配石遺構の検出は注目される。直径30～40㎝のほぼ楕円状の石を直径約７ｍの環状に敷きつめ、中央には直径約2.4ｍの石を配しない部分が設けられていた。また、中央部に面する内側の配石は、大きめの細長い石が立てるように並べられていた。配石中より、溶結凝灰岩製の磨製石斧が２点出土している。このような配石遺構は、西日本では稀であり、この地域では、足助町今朝平遺跡に次いで２例目のものである。　（梅村清春）

資料紹介

岩倉城遺跡出土の駿河系土器

岩　倉　市



県道萩原・多気線建設に伴い発掘調査を実施している岩倉城遺跡は、岩倉市のほぼ中央部を南北に流れる五条川の両岸に広がりを持つ遺跡である。従来、戦国時代の城館跡として著名であり、調査自体もそれを明らかにすることを主目的として進められてきたが、今回、五条川左岸の調査区において下層より古墳時代前期の遺構・遺物を検出し、出土遺物のなかに駿河系土器の特徴を有する土器片を確認した。

駿河系土器が出土したのは、元屋敷式後半期の壷、小型丸底壷、S字甕、高杯、器台など比較的まとまった資料を出したSX01、SE01を覆う包含層中からであり、現在までに3片の土器片を確認している。これらの土器片は胎土・文様などより同一個体の壷の胴部上半部と考えられ、器面上には単節斜縄文及びその下部に結節文を施しており、駿河地方において古墳時代前期の大廓式とよばれる土器に酷似している。

岩倉市内は、弥生～古墳時代の遺跡が密集しており、大山寺町に所在する小森遺跡からは東日本系の土器が出土している。また、駿河地方を含め、東日本の各地には、尾張地方のS字甕が伝播しており、古墳時代に尾張と東日本各地との文化交流を予想することができる。今回の調査で出土した駿河系土器は、それを裏付けする貴重な資料となろう。　（服部信博）

遺跡を語る昆虫 ― その2 ―

糞虫と朝日遺跡

ひと口に糞虫（コガネムシ科食糞群）といってもその生態はさまざまである。動物の種類はもちろん、日当りや糞の硬さによっても集まってくる糞虫は異なっている。なかには人の糞のように多くの糞虫が好むものもある。このようなことから、遺跡において糞虫は汚物集積の指標昆虫として重要な役割を果たすことがある。

昭和63年度の朝日遺跡の調査では、A'区の溝（SD01）の中にマグソコガネやエンマコガネなど多くの糞虫を産した層がみられた。この地層は、ちょうど朝日遺跡が最も栄えた弥生時代中期にあたり、まさに人と糞虫との関わりを示す好資料となった。

また、今年度の調査では、弥生時代中期の溝の珪藻を調べたところ72％が汚濁性の種群で占められる（森　勇一：未発表資料）という結果が得られた。この頃の遺跡周辺は、かなり汚れていたことが珪藻分析からも裏付けられたことになる。

さらに最近になって、これまで朝日遺跡から大量に出土していた獣骨の中にブタの骨が多数含まれていることが、国立歴史民俗博物館の西本豊弘氏によって指摘された。もしブタが飼育されていたとすると、人の糞だけでなくブタの糞によっても遺跡のまわりは汚濁が進み、これらの糞にはたくさんの糞虫が集まっていたにちがいない。　（伊藤隆彦）

資料紹介

小田妻（おだつま）古窯跡群の調査

瀬　戸　市

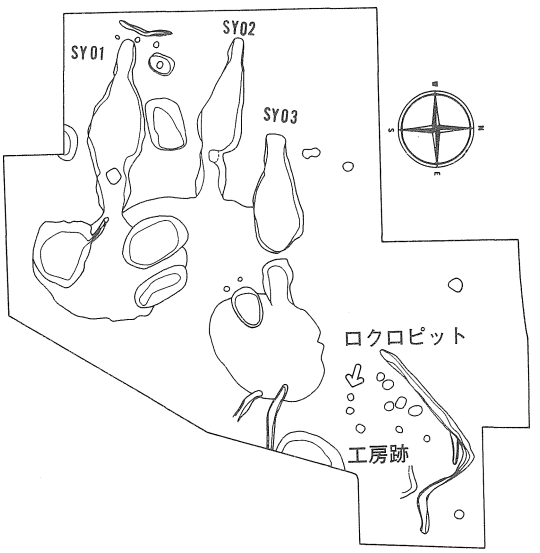
小田妻古窯跡群は瀬戸市の北西部、水野地区に存する鎌倉時代の古窯跡である。平成元年度はA・B２地区、約2,000㎡の調査をおこない、窯体６基・工房跡１ケ所等を確認した。

A区では丘陵の南東斜面に窯体３基・工房跡１ケ所、北西斜面に窯体１基を検出した。南東斜面の灰原は下半分が整地により削平されていたが、窯体の残存状況はよく、一部は天井の残っていたものもあった。

B区では丘陵の南東斜面に窯体２基・掘りかけの窯２基・炭焼き窯１基等を検出した。窯体のうち１基は整地により上半分を削平されていたが、もう１基と灰原は完存していた。

A・B両地区とも窯体はすべて分焔柱を有する害窯である。窯体の長さは10m 前後であるが、最大幅は３m を超えるものが多く、当時の平均的大きさが2.5m 前後であることと比較するとかなり大型の窯体であるといえる。

掘りかけの窯は、１基は焚き口部分のみを掘り、分焔柱の脇を少し掘りかけた状態で中止しており、後に粘土だめに転用している。もう１基は分焔柱の脇を掘り抜き、焼成室の途中まで掘削してやめている。なぜ途中で放棄したのかはっきりしないが、当時の築窯方法を知る上で貴重な資料となるであろう。



A区南東斜面遺構配置図（1/400）

工房跡のロクロピット

炭焼き窯は楕円形のプランを有するもので、床面には炭が残っていたが土器はほとんどなく、灰原末端に位置しているため、年代・窯との関係は不明である。熱残留磁気測定をおこなっているのでその方面の成果を待ちたい。

工房跡は丘陵の南東斜面の一端を掘り、排水溝をめぐらし、反対側に盛土をして平坦面を造り出している。床面には多くのピット、カマドらしきものと炭、焼土、生の粘土が見られる。ピットのなかの１つに灰白色粘土を充填したものがあり、半截して掘り下げると山茶椀の重ね焼きしたのが正位置で埋められていた。それを取り除くと、周囲の灰白色粘土とは違った黄色の砂が詰まった径約10cmの穴が見つかった。これは恐らくロクロピットであり、この工房跡でロクロを使用していた可能性が高い。

遺物は灰原から山茶椀・小皿・こね鉢が多数出土している。山茶椀は数型式にわたるがいずれも13世紀代のものである。それ以外に漁具である陶錘や用途不明の陶丸があるが、これら日常雑器に混じって施釉陶器である灰釉四耳壷や火舎形香炉も併焼している。また窯の前庭部や工房跡から工人が煮炊に使用したと思われる土師鍋・羽釜も出土している。

小田妻古窯跡群の調査では窯跡以外にも掘りかけの窯、工房跡やロクロピット等が確認でき、当時の窯業生産のあり方を知る上で貴重な資料を提供したと言えよう。

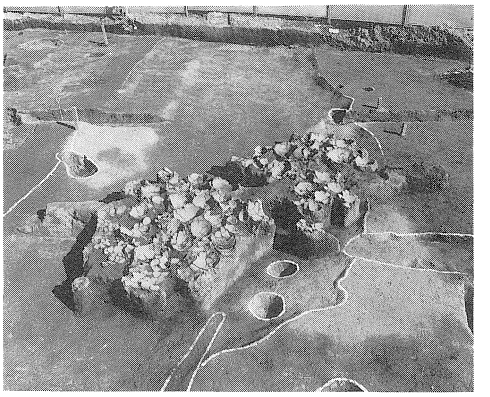
（城ケ谷和広）

発 掘 ニ ュ ー ス

森 岡 遺 跡

豊 橋 市

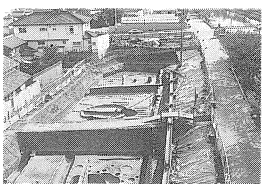
本年９月から10月にかけて、本センターでは、豊橋市森岡町の森岡遺跡の発掘調査を実施した。遺跡は豊川左岸、石巻山西麓の台地端に立地する。調査の結果、弥生時代中期および平安時代後期の住居跡が、それぞれ2軒、9軒検出されたほか、一辺12m前後の方墳(?)の周溝と想定される溝および鎌倉時代の土坑がみられた。殊に方墳とおぼしき周溝のコーナーから100個体を上まわる土師器・須恵器が、あたかも“据え置かれた”ような状況で検出され注目を集めた。おそらくは、従来研究の空白の観がある東三河地方の６世紀前半代の土師器の編年研究のみならず、（古墳とすれば）葬制研究の上で貴重な手掛りを与えるものと考える。



（北村和宏）

清洲城下町遺跡

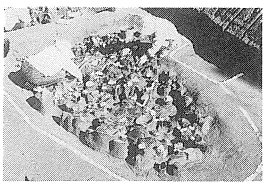
清洲町



Ｃ区畝状遺構

Ｂ・Ｅ区からは、17世紀末から19世紀初めの溝・土坑・井戸等を多数検出し、その結果、宿場町が17世紀末から18世紀初めから存在していたことが明らかになった。

Ｃ区からは、五条川改修（1794年）以前の畑地の畝状遺構を検出した。



Ｂ区ＳＸ01遺物出土状況

岩倉城遺跡

岩倉市

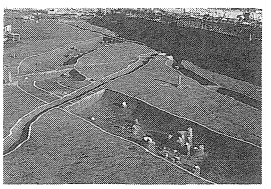
Ｆ区ＳＤ05全景

Ｅ・Ｆ区を調査中であり、両調査区とも五条川の左岸に位置する。岩倉城期の遺構としては、幅８～９ｍ、深さ２～2.5m程の堀と考えられる大溝を２本検出した。また、下面調査で古墳時代前期の遺構を確認し、当該期の遺物が多数出土している。

Ｅ区下層遺物出土状態

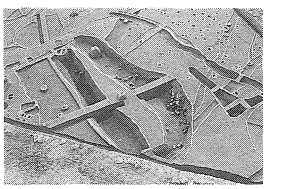
松河戸遺跡

春日井市



Ｄ区弥生時代前期の溝

Ｄ・Ｆ区上面は中世の水田跡を検出。Ｄ区下面は自然河道に対し円弧にめぐる弥生時代前期の溝、土坑３基を検出した。自然河道の下層より縄文時代晩期後半の土器とともに、打製石斧、弓等の遺物が出土した。また、Ｆ区北西部を中心に鎌倉時代の遺構を検出した。



Ｆ区鎌倉時代の溝

センター日誌

埋蔵文化財調査研究会

平成元年7月7日(金)
愛知県埋蔵文化財調査センター
参加者　95名

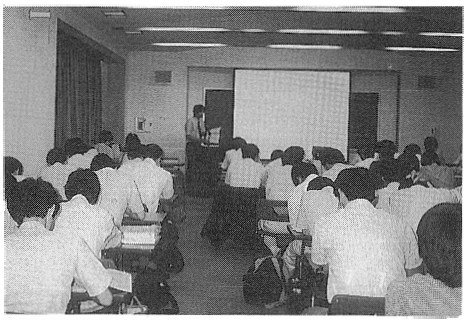
埋蔵文化財基礎研修会

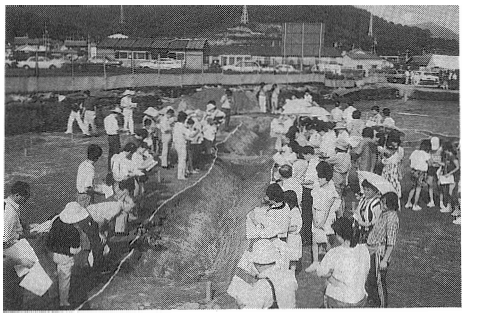
平成元年8月24日(木)・25日(金)
愛知県埋蔵文化財調査センター
参加者　28名

現地説明会

平成元年9月9日(土)
東光寺遺跡　幸田町
・弥生時代後期及び中世の溝、深溝断層
土偶など出土遺物の展示
参加者　約250名

平成元年10月14日(土)
小田妻古窯跡群　瀬戸市
鎌倉時代の古窯、工房跡など
参加者　約300名





来訪者

5・26　新川町商工会　4名
6・7　鹿児島県議会議員　13名
立田村教育委員会　29名
・9　稲沢農業改良普及所　8名
・12　愛知工業大学　飯田汲事氏他1名
・20　祖父江町教育委員会　10名
・21　吉良町教育委員会　4名
・23　国立歴史民俗博物館　西本豊弘氏他1名
7・11　教育サービスセンター　110名
・12　津島市役所　3名
・13　岐阜県教育委員会　29名
・31　津島保健所　5名
8・1　安城市教育委員会　40名
・2　滋賀県栗東町教育委員会　3名
・3　新城市教育委員会　6名
・11　津島市経済環境課　4名
8・19　吉良中学校教諭　10名
・21　岡山県教育委員会文化課　3名
・23　稲沢市教育委員会　45名
岐阜県各務原市教育委員会　3名
・28　津島市教育長　長谷川春一氏他2名
・30　尾西市文化財審議委員　8名
9・5　群馬県埋蔵文化財センター　2名
・27　七宝町教育委員会　30名
・28　尾張社会教育主事　20名

埋蔵文化財愛知 No. 19
発行　平成元年12月
編集　(財)愛知県埋蔵文化財センター
〒498　愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新■字野方802番24
TEL　0567−67−4161
印刷　株式会社 クイックス